

---

# 非日常という名の日常

ストロンジウム

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

非日常といつも日々の日常

### 【著者名】

ZZマーク

【ストロングジウム】

【あらすじ】  
完全オリジナル、

いつたいどうなるのか？

それは

私にもわかりません！！

でも、創作よりは指が動きやすかつたです。w

### 基本ギヤグ要素

増やしたいと思つてゐるんですけどできるんだうつか?

始まる前から心配です。w

まつ、【あらすじはその場で決めるもんだ!】 つまり行き当  
たりばつたり。

たのしかつたらいいな

更新は、18時前後にするつもりです。w

決して、アクセスが一番よさげだなんて思つてないんだからなッ!

## 【プロローグ】（前書き）

これが、俺のオリジナルだあああ！！！

## 【アロローグ】

場所は太陽がジリジリ照り付ける砂漠

「見つけた」

前方に異質な何か（・・）を見つけてその手に武器を再現させてバトルエイズ 戦闘体勢に入った。

そして右手に銃を左腰に再現した刀に添え近くの茂みに身を潜めリプロダクション その異質な何か（・・）に鋭いまなざしを向けた。

「タイプ（クシー）か」

ランクで言うとしたから十四番目、昔の自分は倒せなかつたが今 の自分では何の苦ではない。

そう判断して左腰に差していた刀を収納して、他の武器をその手 クローズ リプロダクション に再現した。

容貌は、中世ヨーロッパ時代に存在していたような剣の柄のみが 現れている。

それに刻まれた紋様は何か神々しさを感じるのだが・・・。

「こいつでいいかな？」

「じつ  
剣はギミックこそ良いんだけど弱いんだよな～うん  
まったく、昔このギミックにつられて泣いたやつが何人いたが・・  
・・・。

「フェイ」

その声に呼ばれたのか先ほど帯刀していたところに鞘が現れた。

そしてその鞘に柄を入れた。

この剣の特徴の一つであり、巷で【泣かせ】の異名を持つ理由である。

その理由とは、攻撃力弱いくせに毎回納刀しなければ刀身が出てこないという使用があるためだ。

これがあるせいか、よく【縛り武器】として上げられるのだ、ちなみに今もそれと同じ理由で使用している。

「それで」

剣の剣に手を添え抜刀準備をして異物を見た。

その様子は、少しだけ人の形に似ていた。

その色は黒というより漆黒に近く心なしか影を思わせるものだった。

そして頭そこに当たる部分には細い三日月のような黄色い目が浮かび上がるよう光っていた。

「はああああああああツツ……」

その叫び声と共にくさむらから飛び出し文字通り弾丸を放った。ダン、ダン、ダン、と放つたび弾は異物に吸い込まれるかのように的確に命中するが。

特にダメージが通つた様子は無いままに、こちらに向けてその漆黒の腕を伸ばした。

「まあ、そうだよな」

こちらに向かつて来る腕を見ながらその、拳銃を勢い良く空中に放り投げて帶刀した剣に手を添えてその腕に抜刀一閃、その勢いの

ままその漆黒の体に袈裟切り、超高速で納刀、そしてもう再び袈裟切りそしてついにもう一度納刀して刀身の出現したそれを異質な何か（・）に突き立てた。

それとほぼ同時に、投げていた拳銃を見ずに手にしてクローズ収納した。

「おーわりつと」

そう呟くとその場から文字通り粒子のように姿を消した。

## 【アローラーク】（後書き）

疲れた疲れた

### 第一話【最悪の日】

一日後に掲載予定です。w

ではではまた会いましょう。ノン

【靈應の印】（前書き）

今回の字数40000オーバー。俺的には多い方

## 【最悪の日】

「ロ・グ・ア・ウ・ト・ツと」

造二（そうじ）は大きく背伸びをして時計を見ると金曜日を示していた日付は変わり深夜の一時を廻っていた。

「ふう～、今日は終了つと」

だいたい一年前からはじめたこのネットゲーム【英雄の伝説】闇を閉ざすモノ】は初めこそ嫌々だったの筈だったのだがいつのまにかハマってしまっていつのまにかちょっとした有名プレイヤーとなっていた。

現に【刀の探求者】というと、十人に三人くらいは分かるだろうな、うん。

まあ、いいや眠いし、ほんとなんで神さまは人を寝なけばいけない体にしたのかね？どうでもいいけど。

そしてノートパソコンを閉じてすばやく布団に入り眠りについた。

「ヌクいね・・・」

~~~~~そして時は過ぎ~~~~~

一曰たつていつのまにか月曜日。

「うん、良く寝たなあ・・・」

卷之三

悲しいかな、いくら眠たくても行かなければならぬ、これが悲  
いが学生の性だ。

俺は、いつものように朝食、洗顔、歯磨きといつものように過ごしているとふと気づいた、いつもより田が上がるのが早くないか？

うん、本当に時間がヤヴァイや。

一瞬ほんと一瞬だけだと時間が止まつたよ。は感じた

これが今田ベジタ、学校休んでー、なんじゃなーか?

さくなるのが目に見えるからしあうがない。

「たぐアイツは俺が休んだら家まで来るもんな、学校を途中から休んでも、ほんとビビッたよあん時は大変だつたな、むっちゃ泣いてたからそれ泣き止ませるので大変だつたぜ、ほんと、いや、マジで。

……つて、こんな考え方している場合じや無かつたせ。

「いつ、行っています！！」

そう叫んで我が家を後にするのだった。

登校状態は端折つて・・・・・。

## 校門前

「はあ、はあ、はあ・・・・・やつと、着いた。」

目的地に到着した造二は、久しぶりに全力で走ったためなのか、凄い倦怠感を感じながらもその頭を上げた。

「開いてない・・・だと！？」

そして驚愕した。

目的地の門は開いていなかつた、というか開けた形跡も無いようだつた、どうやら遅刻ではないようだつた。

でも、だからといつて学校があるという状態でもなさそつだ、なぜならここにくるまで一度もおんなんじような格好をした（つまり学生）人があまりいなかつた気がする。

結論は・・・・・。

「・・・・・もしかして今日、休みいいい！？」

なぜだ、全く身に覚えが無い。

（どうかどうこう）ただただ・・・・・落ち着け俺落ち着けえ

俺は、ケータイを見て確かめる事にした、人間つて間違えてしまう時があるからな、うん。

時間・・・・・・・・・・『八時三十分』・・・ギリセー

フ

日[に]ち・・・・・・・・・・『月曜日』・・・・・セーフ

イベント・・・・・・・・・・『国民記念日』・・・・・はい、ア

ウトオ！—

「・・・・・・・・・詰んだなこれ」

はあああああああ、と登校途中にもらしたため息の数倍深い感じのため息を出した、

「きょう、ツイてないな・・・」

ネトゲでは、見たことも無いプレイヤーが絡んでくるし、ネトゲ内で詐欺に会うし登校中にこけるし、定期切れているし、頑張ってきた学校は休みだし、さつき気づいたけど靴の紐ほどけているし・・・なんか悲しくなってきたぜ、まあまだ良いか、もしこれでいいが来たら世纪末モノだつたからな、はつはつは

「おやおやあ～？ ここにいるのはいとしのソージくんではないかあ！！」

「一体どうしたの？」と声をかけて来る見知った少女が一人いた。  
なんてこいつた俺フラグ一級建築士の免許なんて取つた覚えないんだ  
けど・・・。

「ん？ そつちこじうしたよ、千羽」

俺は、先ほど立てたフラグによつて現界（笑）した幼馴染の質問を質問で返した。

「えっとねえ、普通に登校してきたらガツコ一開いてなくて、なんか変だなー？ なんて思いながらも暇だったからなんとなくガツコ一の周りをぐる~うつて回つてきたらなんとなんとつ！！ なんか男の子が校門の前で。〇・二 な体勢でいるから誰かなー？ つて見てみたらこれはここれは、いとしのソージくんではないかあ！？ どうしたのだ？どうどう壊れたのかあ！？ なんて思いながら声かけたのだよ～」

「・・・へえ、そりなのにお疲れさま」

相変わらず「イツは朝っぱらからテンションが高いな、なんか疲れれるぞ。

「もっといたわれ、もっともっとまー」「・・・すげーですな千羽サン」「そうだろそうだろ？ はつはつはー。・・・で、この荷物何？」「ん？ これが？」

俺は、アスファルトの上に置かれた登校カバンを指した。

「うん、それそれ。 一体なにがはいつてんの？」

「すつゝへ重しがだけど。と千羽が尋ねる。

「・・・。PCだ。 しかもデスクトップタイプ」「ですか？ ふたいふ？ 何それ？」

千羽はその可愛らしい大きな目を頭と共に傾げる。

黙つてゐるとそれと別にこのアクションする時は可憐このにな、ほんと残念だよ。

実際この千羽という幼馴染少女はかなりのレベルだと思う、雑誌のモデルなんか目じゃないね。可愛いといつジャンルではの話だけど。

まあ、もつとも俺はもつと落ち着いた感じで髪が長い方がタイプだからなびかないけどな。

ちなみに黒髪が良い、JJ超重版。

「ああ？ そんな事も知らんのか、お前は？」

「いや分かる分かる、アレでしょ？」  
「あのですか」とつぶでしょ？」

「一体・・・・・どのデスクトップだ?」

「アレだよアーレ、会議とかに置くやつあるじやん? 三角の『議長』

「」

童子ええええええええええ！！

いや違うだろ、それは・・・・・ん?なんてやつだっけ?

といつが『団長』は書かねえだろー見たことないし、

『議長、いらん  
いるんだから、因長』  
『それ、一体どういふことよ?』  
『どうう!!』

「・・・・ふあいなるあんさー？」

ん？それって質問した方がいいやなかつたつけ・・・？

「ぐう、わあ！」

「賞金の一千万円は、没収です」

「そんなあ～」

のつてやるとそんな反応をしてきた、ほんとにハイツノリいな。  
たまに空氣読めないけど。

「不正解だ。正解は、とこいつが初めから書つてこるじゃねえかP  
Cだつて。要する机に置くタイプパソコンだ」

「ん？ 机の上に置くタイプ？ もしかして、それってパソコン室  
にあるみみたいなやつ？」

「ああ、あんなボロもんじやないけどな」

「でも一体ソージはどうしてそんなの持つてくるの？」

なぜ？ ひそりやあなあ。

「会長命令だよ

「ぶちよ～めいれい？」

何それと聞いてくるが、そんなもん俺だつて聞きたいわつ。  
なんか急にメールが来て、

『部活でPC使いたいんだけど、造二ならいつぱい持つてるだろ？  
すまんけど、いらんやつ持つてきてくれ。』

というか持つてこい、これ会長命令。

PS・なるべく高性能希望。

つてきたんだ、しかも寝る前に、ほんと俺がPC開いてなかつた  
うどうするつもりだつたんだろうか？

というか持つて来たら持つて來たで学校開いてないし、帰るかな？  
祭日だったら、フレンドココしているだろ？

「よし、帰るか」

「ふえ？ 何で？」

「そりやあ千羽、今日が学校休みだから・・・・あつ」

「ええつそーなの！？ だつたら遊びに行こうよ。ねえねえ」

失言だった、千羽に学校がないなんて言つたらこいつなる事分かりきつていたのに、何たる不覚、ほんとに今日は最悪の日のようなだ。

「ねえねえ、どこにする？ ゆ～えんぢ？ すこぞくかん？」

「・・・・・・・・・・・・」

そして、こいつなつた千羽はどこでも止まらないのだからしたがうしかないな。

すまんフレンドのみんな、夜に埋め合わせするから。

こいつして、今日も徹夜が決まった。

「ん～・・・・やうだな、どこにするよ？」

「そ～だなあ。 そじやあ今日は買い物行こひへ、買い物」

「買い物？ 一体どこで？」

「ここの前いい店見つけたんだよね～」

「...」

「・・・わかつた期待しないでおぐ。 待ち合わせ場所はいつもの」とこじこじよな？

「うさ。 いつもの場所で十時くらいで集合で

そう言つて俺と千羽はこいつたん離れた。

「ん？ 十時つて事は、昼飯お～いるつて事だよな・・・

なんて策士だ、とおもう造二だつた。

## 【最悪の日】（後書き）

これに出でたネットゲームの特徴が何が？

ここあつたら「メお願こします。

なんせネーミングセンスないんで〇んな

### 第一話【トート】

更新はこつこなる」とやう（・ーーー）

では、ノシ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5819z/>

---

非日常という名の日常ツ

2011年12月25日18時52分発行